

「アメリカでの交換留学とオーストラリアでの長期インターン」

工学部工学科 協創経営プログラム 丸山歩

・留学の理由・目的

地場産業の海外展開に大きく貢献できる人材になりたいという目的がありました。そしてこの目的を達成するために、アメリカのロードアイランド大学で異文化マーケティングを学び、イギリスの日本文化発信施設ジャパンハウスでインターンをすることが必要だと考えました。

大学入学当初から漠然と留学したいと思っていましたが、1年次夏休みのフィリピンでの短期留学・2年次の工学部のG-DORMプログラムを経験して、長期留学をしたいと強く思うようになりました。経済面での懸念は最後まであったものの、給付型奨学金を活用すれば解決できると知り「交換留学+休学して海外インターン」することを決めました。

・留学先での学習・活動と生活の環境

交換留学（アメリカ・ロードアイランド大学 2019年9月~12月）

ビジネス系2科目+語学系2科目を履修。授業時間自体は多くないですが、レポートなどの課題が日本に比べて段違いが多く、その準備にかなりの時間を使っていました。また、余裕があるときは日本文化や日本語を学ぶクラスにも参加させてもらいました。

学習面以外では、同じ寮に住む友人と過ごす時間が多かったです。この国際寮は半数が現地学生、残りが留学生という内訳で、多様性に富んでいて非常に好きな環境でした。寮のメンバーでチームを組んで学内スポーツ大会に出場したり、長い休みを利用してボストンやニューヨーク、国立公園に行きました。ヨーロッパからの留学生が多かったため、彼らとお互いの国の慣習や考え方について話すたびに日本の独自性や自分らしさに気づかされました。同時に、国や地域が違っても人によっては共通点が多く、背景や国籍にとらわれずにその人自身と向き合うことが重要だと感じました。

インターン（オーストラリア・Simply Native Japan 2020年1月~6月）

アメリカからオーストラリアに移動し、日本工芸品を販売するベンチャー企業で半年間インターンをしました。従業員が4人で任せられる範囲が広く、代表を務める日本人女性の方が私の留学目的について深く理解してくれていたため、本当に理想的なインターン先でした。主にイベント企画とSNS運用に取り組みましたが、外部関係者との交渉やイベントのプラン策定、雑誌掲載記事の執筆などチャレンジングな業務も任せて頂き毎日楽しかったです。代表の方は国家公務員を退職後、独立してオーストラリアで起業しており、自分がこれからどんな社会人になり、どんな企業で働きたいかを深く考えさせられました。

生活面ではFacebook等を使いシェアハウスを探してコロンビア、中国、メキシコ出身の人たちと住んでいました。交換留学と違い、自ら積極的に動かないと現地の人との交流が限られるので、週末はサッカーチームに参加したりして現地の人と交流する機会を多く持つように意識していました。

・特に印象に残った留学中のエピソード

- インターン先の変更

本来であれば外務省がイギリスに設置している「JAPAN HOUSE LONDON」でインターンをさせて頂く予定でしたが、最後までビザ取得の目途が立たず急遽変更しました。2019年1月から外務省の方に相談していたので変更を決断したときは非常にショックでした。交換留学先でのテスト直前の時期に新たなインターン先を探すことになり精神的に大変でしたが、ここでもトビタテ・大学関係者の方々にサポートして頂き新たなインターン先を見つけることができました。

このエピソードに限らず、コロナでの早期帰国なども含めて「自分で計画してそれを実行する」ことの難しさを痛感させられました。今回の留学中は予想できないようなことだらけでしたが、振り返るとそんな経験からも得られる学びは多く、必要な経験だったようにさえ感じます。

・語学がどのくらい上達したか

帰国後に TOEIC, TOEFL 等で客観的に評価できていないので、以下は4技能についての主観です。

- Speaking

間違いなく最も向上しました。理由は大きく2つあると考えていますが、1つは日本語を全く使わない日も多く、「話す量」が圧倒的に増えたためです。特に交換留学中は、授業では基本的に発言が求められる、それ以外の時間ではヨーロッパから来ている留学生と過ごす時間が多かったため、「文章をすぐに組み立てる力」が鍛えられたと思います。2つ目として身近にはネイティブの学生ばかりのため、彼らの話し方を真似してみることで発音も良くなった気がします。一方で「語彙を増やす」には、やはりある程度は自分で勉強する必要があると思いました。

- Listening

聞く量も圧倒的に増えたので、短期間で実感できるほどに向上しました。一番のメリットは「非英語圏の人の英語が聞けるようになる」ことだと感じています。ネイティブ学生の英語は想像よりもかなり早く最初は苦労しますが、スピードに慣れると発音等はきれいなのでやはり聞きやすいです。それ以上に交換留学生同士の英語を理解するのが大変でした。自分も含めてやはり母国語のクセが残るので、それが理解できるまでに少し時間がかかりました。同時に、アメリカからオーストラリアに移動した直後はいわゆる「オーストラリア英語」が全く聞き取れなかったのも、やはり慣れは重要だと思います。

- Writing

ライティングは毎週ある大量のレポート課題で鍛えられました。「書く→ネイティブに添削してもらう」を大量に繰り返すことが向上の近道だと思います。そうすると、日本にいても添削相手さえ見つけられれば伸ばしやすい技能かもしれません。また、ライティングに関しては TOEFL や IELTS の対策が留学先で一番活かせるように思います。オーストラリアでのインターン中は「ビジネスメール」に非常に苦労しましたが、これも周囲に時折チェックをお願いすることで身に付けていきました。

- Reading

4技能の中で伸びを感じづらかったのがリーディングです。理由としては留学前からリーディングに使う時間が多かったからだと思います。スピーキングやリスニングは留学中と日本にいた時では圧倒的

に量が違いましたが、英語の記事や読み物は日本にいても簡単にアクセスできる、また受験等で継続的に触れているため、リーディングは留学せずともかなり伸ばせると思います。体感できる一番の変化は、英語の長文を読むことへの抵抗が全くなかったことです。

・トビタテで留学して良かったこと

トビタテに申し込まなかった自分を想像すると不安になるくらい、トビタテは自分にとっての大きな分岐点であり、大学生活を振り返っても一番の選択でした。トビタテの良さはやっぱり「コミュニティ」だと思います。事前研修で話し合ったメンバーとは今でも連絡を取りますし、アメリカでもオーストラリアでも「トビタテ」という繋がりだけで多くの人に会いました。そして帰国後には東京にある「トビタテハウス」というトビタテ OBOG が運営しているシェアハウスで生活しており、帰国後もトビタテの繋がりを感じる毎日です。

また、留学計画作成から選考まで準備期間が長く、その過程で自分の留学に関わる多くの方の存在を知るからこそ、インターン先変更や早期帰国といったしんどい時にも踏ん張れたように思います。

・留学して得られたこと・留学を薦める理由

留学は予期せぬ大変なことも多い分、得られるものも本当に多いです。その中でも、留学したからこそ得られた最大の学びは「違う立場の人への理解」です。海外に住むと「外国人」になります。特に留学先では日本人は完全に少数派です。どんなに留学の目的が明確でやる気にあふれていても、つい友人が家族や友達と過ごす写真を SNS で見て孤独を感じるときもあれば、差別体験をすることも正直あります。日本に日本人としてずっと住んでいたら経験しないであろう感情を抱くことで、他の人の気持ちを今まで以上に想像したり、日本で生活する外国人の大変さを考えるようになりました。一見するとネガティブな経験かもしれませんが、これから国籍や価値観の違う人たちと働くことが当たり前になる環境下で、こういった経験は自分を強く支えてくれると思います。

留学が全ての人に必要だとは思いませんが、少しでも興味があるなら短期からでも挑戦してみることを心から勧めます。自分がトビタテに申し込むきっかけになったのは間違いなく 1,2 年次の短期留学経験ですし、交換留学は想像できて海外インターンは全く想像していませんでした。「留学はお金もかかるしなんとなく大変そう」だと思っていましたが、そういった選択を重ねることで、大変そうな選択肢を選ぶハードルが下がり、どんどん新しい挑戦がしやすくなりました。留学に限らず大学生活は本当はたくさんの選択肢がありますが、自分が興味あるものは積極的にやってみると、また新しい選択肢が見えたり尊敬できる人に会えて、充実した大学生活が過ごせると思います。